

明治期英書の日本

—日本の宗教生活—

山下 英一*

Japan in the English Books in the Meiji Era:

The Religious Life of Japan

Eiichi YAMASHITA *

序

平成5年の早春に、「日本人の见えない神への信仰」と題して、次のような文章を書いてみた。

「初日のひかり さし出でて、四方に輝く 今朝の空、君がみかげに 比えつつ 仰ぎみる
こそ 尊とけれ」*1

今年の元旦は、どうしてかこんな昔の小学生の頃の歌が口をついて出てきて、オヤと思った。北陸に住んで、元旦に雪のない天気晴朗な朝はめずらしい。それが今年は朝日がまぶしくて、すがすがしい元旦を迎えたので、この歌を思い出したのだろう。

正月は家族で部屋にまつた神棚にお詣りする。それから雑煮で新年をお祝いするのであるが、燈明とかがみ餅とその上のみかんとお神酒を供えた神棚は私の小さい頃も今も少しも変わっていない。

大東亜戦争の終結の翌年、小学校を卒業した年配の私にとって、その後の四十数年を生きた今、ようやく日本古来の神という言葉と、実体はないが前に立って柏手をうち、ぬかずく姿がよみがえってきたと思われた。

日本はたしかに変ってきた。そのことで異議をとねえようとは思わない。しかし過去の日本人のあったこと、そこにも切羽つまった生活のあったことへの歴史の続きを思うと、私の今年の元旦の気持はこれまでと少し違って、真面目なものがあつた。

ハーンは『神國』*2のなかで日本人の直載な崇拜の光景を印象的に述べていた。

*外国語系列 (Department of Foreign Languages)

*1 「一月一日」千家尊福作詞、上 真行作曲。明治26年。

*2 *Japan: An Attempt at Interpretation* New York, The Macmillan Co., 1904.

「朝、起きてすぐ顔を洗い、口をゆすぐと太陽に向かって両手を打ち、頭を下げて、畏れおおい日の神に敬虔な気持ちで簡単な挨拶を述べる。と同時に国民の人としての義務を天照大神への敬礼で表わす。」

さらにハーンはもっと鮮明な印象を思い出す。

「隠岐の島のわびしい浜。若い漁夫の裸の姿が小舟の舳先に見える。朝日に両手を打って挨拶をしている。太陽の真赤な光が漁夫をブロンズの像に変えていた。」

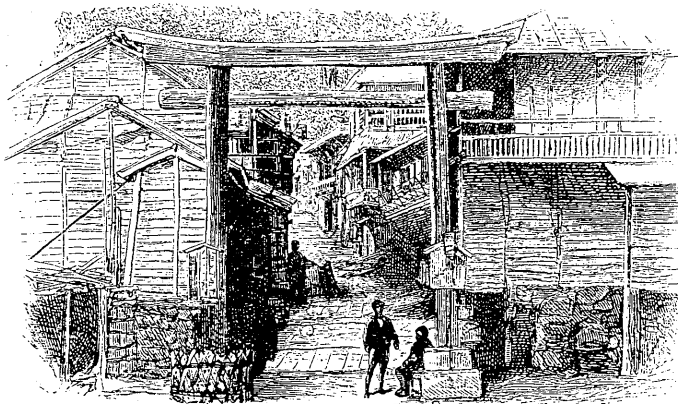
先日、私は家の古い手紙のなかに、日中戦争当時、出征した戦場の息子に宛てた父親の手紙の下書きを見つけた。そこには息子の武運を祈ってこのように墨書してあった。(部分)

「出征其后出花の茶御飯を写真に供え、毎日午前四時には母は神社参詣致すのであります。先達母は七日程間鯖江行留守の日其のかわりに初枝(息子の嫁)毎朝参詣しました。神仏の大恩頭におき一刻も忘る事なかれ」

神の加護への祈りはここでは自分の為めでなくて、苦境に置かれた息子の為めに少しでも同じ苦境を味わって息子の無事を祈るのであった。

これらの信仰は国民的なものであるとハーンは考えた。ハーンが『神國』を書いた日露戦争当時、日本人の心を一つにしたのは、天皇(ミカド)は太陽の女神の子孫であるとの思想であった。他方、生きている者の幸福は死者の霊の意志によって決定されるとの考えがあって、お祓いの行事が伝承されてきた。

「寒垢離にせなかの竜の披露哉」は一茶の句であるが、当時の隅田川にかかる両国橋での神仏を念じて寒中に水を浴びる修行の様子である。これは日本人の清潔にも通じている。「清潔は敬神にもっとも近い」という西洋の諺があるが、ハーンは日本人の欠かさない風呂や家の中をきれいさっぱりしておく習慣は、その理由を敬神に見ていた。



* 1

日本人の祖先崇拜とお祓いは古代ヨーロッパ人の信仰とお祓いの行事と似通っているとハーンは述べる。しかし無生物崇拜は日本独特のようで、例えば、先生は自分の筆記用具を粗末に扱えない。用紙を下らないことには使えない。そんなことをすれば、習字の神様をおこらすことになるなどの場合をハーンは持出

* 1 *A Voyage in the 'Sunbeam', our home on the ocean for eleven months* by Mrs. Brassey, London: Longmans, Green, and Co. 1878. p.357 Arima. The Village of Bamboo Basket Work.

してくる。

清潔のみならず用心深さや塵埃のないことがどこにいても信仰を持つ者の守るべきことであって、人が見ていようがいまいが、そういう見えないものへ心の目が働くことを強いられた。日本人にとって見えないものへの敬神が文化遺産として継承されてきた。

ハーンの日本瞥見は学問的というより、日常の経験と見聞がその根本になっていて、そこから日本文化の特質を感じとっていったといわれる。日本人と同様に神社の鳥居をくぐって、正殿へと歩むことから、ハーンは神々によって日本の心がいかに養われてきたかに関心を持つようになった。その出発点がハーンにとっては最初の赴任地の松江であった。当年、四十歳の明治23年（1890）の八月末のことである。

ところがここに少なくとももう一人、それも明治4年（1871）27歳の米国人教師、その名をウィリアム・エリオット・グリフィスという神学生^{*1}がこれもハーンと同じ日本海に臨む地方政府の一つ、福井に赴任していた。

1. 明治四年の地方の風景

幸いグリフィスには福井在住期間の明治4年3月から同5年1月までのジャーナル^{*2}があるので、そこから神社、祭礼の記事でどんなところに興味を持ったかが分かる部分を引用した。

その1。「山の上で祭りがあった。通りには提灯が遠くまで並び、神社までずうっと続いていた。往来は人でにぎやかであった。いつもの白装束の神主。奉納。遊技があった。」（6月2日）

その2。「町家の金持が祈っている。何か願いごとを書いた紙を、賽銭といっしょに落とす。鈴を鳴らして立去る。」（6月28日）

その3。「年一回の盛大な祭り。朝から始まって、一日中、市中に男女、子供の列がつづく。白い着物に白いかぶりものをつけるか、赤いふちのついた緑の蚊帳を着るかしている。いろいろな種類の囃方。芸者の総出。道化者。年寄りの役者。おもしろい衣装。いろいろな種類の役者。桜や梅の造花。山車、袋をかぶせた傘。神社にありとあらゆる見せものが並ぶ。昼は行列。夜は人だかり。鉄のつり火鉢。紙幣と硬貨の山。通りには百をかぞえる提灯。魔法。ひとりで、又は、輪になっての踊り。歌、道化狂言。芸者。暑い日だったが、福井でこんな人出を見たのははじめてであった。」（8月2日）

*1 お雇い教師に決心した時、グリフィスはニュー・ブランズウィック神学校の学生で牧師の勉強をしていた。

*2 *Journals of William Elliot Griffis, The Fukui Journal 1871-1872* 『グリフィスと福井』 山下英一著。福井県郷土誌懇談会発行（昭和54年）に収録。

その4。「足の痛む人が祈願する神社を訪ねた。ぶらさがった草鞋がそれを象徴していた。耳や歯の痛む人には、石に穴を開けてぶらさげてあった。編み髪。魚の神。泉の神があった。」(12月22日)

グリフィスの日記は少年時代から昭和3年(1927)に85歳で歿するまで続けられた。それも一貫して的確で簡潔な表現で、内面的というより客観性に豊み、とくにそれが福井日記に最もよく発揮された。なにしろ二十歳前から教会学校の原稿を書いたり、新しい経験を詩によんだりすることの好きな文学青年であっただけに、好奇心と公正な判断力と新鮮な描写は、福井日記をその土地に住む日本人にも及ばないくらいの当時の諸相を伝える歳時記たらしめている。

いうまでもなくグリフィスの福井は多忙であった。そもそも維新の時代にあつて福井藩は人材育成に西洋知識摂取の必要を早くから感じていただけに、そのために雇われたグリフィスの責任は大きかった。とくに実験器具を輸入してラボラトリー授業の基礎から工業技術の専門学校への発展を目標にかかげただけに、藩の解体はその夢を不可能にした。

霊峰白山が福井のどこからも眺望できた。8月は休暇を利用して、グリフィスはパーティを組んで白山に登る。7日の全行程である。そこでグリフィスの見たものは巡礼者の一行であり、美しく高い山と日本人の信仰について知った。他方、科学教師として器具を運んでの山頂で白山の高さを正確に測定している。^{*1}

ニュー・ブランズウィック神学校生のグリフィスはラトガース・カレッジ入学前から牧師になることを天職と思っていた。福井のグリフィスは間接的に福音を伝えるしかなかった。新築の洋館に住込ませたお気に入りの優秀な才能の少年数人に新約聖書を講義して、賛美歌を教えた。

このようにグリフィスにとっては日本はハーンのように人生の行き着くところではなく、スタートラインになった。かつて筆者は次のようなことを書いた。あえて再載録したい。^{*2}

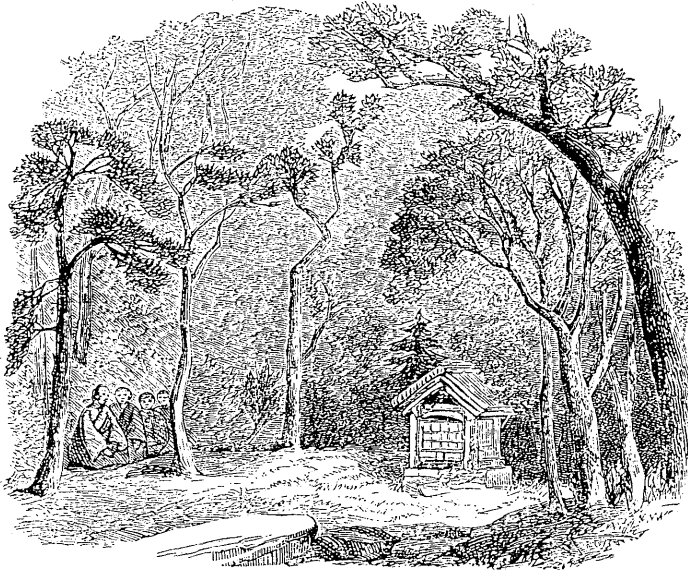
外国文明の影響の大きい東京や横浜だけにいたのではとうてい望めない日本人の伝統的生活が垣間見られたのである。これはグリフィスにとって願ってもない収穫であった。キリスト教を信じるアメリカ人の何人が、異教の寺院や偶像にかこまれた土地に来て、変った言葉を耳にし、キリスト教信者や同国人から二百マイル離れた土地での六ヶ月の生活を経験したいと思うだろうか。アメリカでのかくも美しい教会の社会生活を思うにつけ、また、電信・鉄道・新聞のない、投函してから五十六日もかかって郵便が着くようなところへ何人のアメリカ人が来るとするか、と精神的苦痛を訴えている。しかし一方、福井の人の異人に対する感情や態度はよく、グリフィスさんと呼ぶ。役人は西洋館の建築や化学実験室の設置などに積極的で、自由に散歩や見学を楽しむことができた。親日の感情は福井で芽生えたと言ってよい。そしてグリフィ

*1 「グリフィスと白山—日本は海のスイス—」(山下英一著) 若越郷土研究184号1987年。

*2 『明治日本体験記』グリフィス著 山下英一訳 平凡社 東洋文庫430, (1984年) p.328.

スの書く日本関係のものはすべて福井の見聞と経験に基づいていると言っても過言ではない。例えば「日本の宗教」(1895)*¹の着想は福井に始まった。福井は仏教の本拠地の一つであった。

7月29日の日記によるとグリフィスは四人の学生を夕食に自宅へ呼んで、通訳をまじえて「キ



* 2

リスト教と神道」について活発に討論をしたとある。その中味については書かれていないが、おそらく目立った特色の違いを述べあったのだろう。そして言えることはグリフィスは日本の宗教としての神道と仏教に対し、キリスト教信徒の立場からの偏見をもって臨むことはしなかったし、まして排他的ではなかった。こういう点がグリフィスの特質であって、どちらか極端の側に立つ自己顕示型の人とは明らかに異なる。

2. 神の道 (way or doctrine of the gods)

一歩外へ出るとどこかで神社か寺の祭りがあって人の往来、余興でにぎわう光景に出会う。古い静かな寺から僧侶の読経が聞こえて来る。祠や地蔵に藁をかぶせて暖かくしてある。泉の神の祠があり、大きな石の亀など石でかたどった呪物崇拝の対象物を見る。一人の女が数珠を持って月に祈っている。盛大な行列がやってくる。僧侶の葬式で、白い綿帽子、白無垢の女が20人、先頭に行く。そのあとに提灯、僧侶10人、薪、小さな神社の形をした美しい木棺、袴を着た男約40人とつづいて行く。

このようにグリフィス日記から神仏にまつわる光景を拾い出すだけでも切りがない。明治のこの頃に日本の地方の城下町に生きる人たちが神仏といかに深く関わっていたか、今日の日本人からは想像もできないと思われる。明治政府がとった開化政策の一つに、神祇官制の下での神仏分

* 1 *The Religions of Japan from the Dawn of History to the Era of Meiji : Shinto, Buddhism and Confucianism* New York: Charles Scribner's Sons, 1895.

* 2 *The Mikado's Empire* by W.E.Griffis, New York: Harper & Brothers, 1876. p.89. 'Shintō Wayside Shrine in Modern Japan'.

離と廃仏毀釈がある。これは天皇制による祭政一致を謳った神道国家を目指すものであった。しかし、このいわば天下りの宗教改革が仏教の勢力の強い越前に影響を及ぼすのは明治6年の仏法廃止に抵抗する農民一揆においてであった。

幕末から明治の初年にかけて来日した外国人は、日本の宗教が神社と寺を併合した、いわゆる神仏習合なのを見て、奇異の感にうたれたであろう。ちょうど日本に天皇と将軍の二人の支配者がいて、異人はその対処に戸惑ったのに似ていた。したがってキリスト教文明の国からの来日者はいやおうなしにこれら神仏の特質と歴史に関心がいく。

日本の宗教について英語で書いた最初の一人にラファエル・パンペリー^{*1}というアメリカ人地質学者がいる。パンペリーの旅行は1860年に始まり、まずアリゾナを旅してから太平洋を渡り、日本、中国、シベリアを経由して1865年に終った。1862年、パンペリーが横浜に上陸した時、駐日公使ハリスと交代にブライン^{*2}が新しい公使に赴任したばかりであった。小田原湾から四月の富士を初めて見上げたパンペリーは、この山が数千の巡礼者の行楽の場であって、英国大使から上流社会の者は品位が下がるといって登らないと言われた。このことからパンペリーは一般に上流階級は儒教徒で、富士山は神道の信仰者の山であると信じるようになった。

それではパンペリーは神道をどう考えていたのか。日本には神道 (Sintuism)、仏教 (Buddism)、儒教 (Confucianism) の3つの宗教がある。このうち神道が神武天皇を皇祖とする神政の基礎となった。この宗教の天地創造によると、はじめに神の出現があり、他の二神が万物の創造に預かった後、七人の神々が引き続き世の中を治めてきて、最後の神が妻を迎えて人類の先祖になった。その神が矛先を海に浸すと、そこから落ちた雫が日本の国土になった。その国を五人の神が引き継いで二百万年以上支配し、その最後の神が人間 (a mortal) と結ばれて、最初のミカド (the Mikado) を生んだという。しかしこの天地創造は外来のもので、神武は外国人であると思われてきたことから、初期の天皇の下で移入された信仰と土着の信仰が渾然一体となって神道思想が生じたこともあながち由なしとしないともパンペリーは述べている。とにかく日本の最初の宗教思想はおそらく霊と動物にたいする崇拝で、シャーマニズム (Shamanism) とフェティシズム (Fetichism) の混合になるものだろうともいう。

パンペリーが神道で不思議なのは崇拝すべき像のないこと、神主の職務が外国人に不明なこと、神社に入ると参拝者は手を洗って神殿に近ずき、賽銭箱に小銭を投げ入れて、ひれ伏して短い祈りを言って、鈴を三度鳴らすと、引きさがって行く様子、神社に近づく人の表情はうれしそうで、禁欲主義のかけらも見られないこと、米や酒などが供えられることなどであった。

けれどもこの宗教が浄 (purity)、不浄を守るべきことを要求している点をパンペリーは看過していなかった。1. 浄の象徴、浄化の手段として浄火 2. 心身の清浄 3. 神祭の遵守 4. 参詣 5. 神社と家の両方で神の崇拝が守るべき浄であって、不浄なこととしてその一つに、死

* 1 Across America and Asia, notes of a five years' journey around the world and of residence in Arizona, Japan and China by Raphael Pumpelly, New York:Leypoldt & Holt, 1869.

* 2 Robert H.Pruyn 1833年ラトガース大学卒業。公使在任期間1861-1865。

者に係わりが近いほど、不浄は大きいとした。パンペリーは神道をシャーマニズムやフェティシズムと同じ日本の最初の宗教と見ていたと思われるが、これらの研究は民族学者にとって最大の興味ある結果を産出するに違いないといっていた。

グリフィスは福井にて、パンペリーのこの *Across America and Asia* を読んでいる。^{*1}そしてグリフィス自身が今度はパンペリーのこの本より7年後れて *The Mikado's Empire* を出版した。ついでに書いておくと、前者の口絵が鎌倉の大仏の写真からのリトグラフで、後者は日蓮が北条の武士に首をはねられるところで、にわかに目をくらます光が降ってきて武士の刀が折れてしまう劇的光景が描かれている。いずれも日本の宗教から取材しているのを見ると、十九世紀半ばを過ぎたころから急速に接近を始めた米国と日本の事情が、こういう出版物にも反映されていることが分かる。東洋の日本の異教が最大の興味を引くと思われたのである。

グリフィスが *The Mikado's Empire* 執筆までにたどりついた神道についての考えは、アーネスト・サトウ^{*2}、パークス^{*3}、森有礼^{*4}らの説の援用の域を出ない。チェンバレン^{*5}は神道を日本の最初の宗教と呼び、組織されたものではないという。すなわち仏教、キリスト教、イスラム教といった文明国の宗教のように教理や道德律を命令的に守らす宗教書がない。パンペリーが書いた神道の参拝の様子や浄、不浄の風習がグリフィスの詳述によって興味ある印象を与えるだけである。上述の外国人研究者のなかには神道は中国の古代宗教の天地創造の神話などに似ているといったり、従って神道の起源を中国としたり、日本の土壌の産物にあらずと言い出す者もいた。要するに「神道は一宗教としての特色が殆ど無いので、外国人には理解されない」(Shinto has very few of the characteristics of a religion, as understood by us. [p.99]) という結論になった。これはグリフィスが『古事記』を日本の神道信者の聖書と呼んでいて、しかし物語ばかりで、教訓も教義も儀式も書かれていないと理解したからであった。

ここでむしろ注目すべきことは、ミカドを主権者として敬い、その命令に従うことが、日本人のぜひとも果たすべき義務とされたことである。グリフィスは本居宣長の考え方として、その命令が正しかろうか不正であろうが従わなければならなかった。宣長の解釈による『古事記』は日本国民を精神的奴隷の身分に陥れる原動力以外の何物でもないときめつけたのはサトウであった。また森有礼は神道の主たる考え方は死者に敬虔な気持ちをもつことにあるとして、神道を政治に利用していると主張した。グリフィスがお雇い教師であった明治4年から7年の日本は神道

*1 *The Fukui Journal* 1871年4月1日。

*2 Ernest Mason Satow (1843-1929) 江戸時代末期に通訳・書記官として来日した英国人。公使パークスを助けた。

*3 Harry Smith Parkes (1828-1885) 1865年に駐日全権公使として来日。倒幕運動を助け、明治政府を支持した。

*4 政治家 (1847-1889) 薩摩藩からヨーロッパ・アメリカへ派遣された。啓蒙思想家。初代伊藤博文内閣の文相として国家主義的な学校令を制定した。

*5 Basil Hall Chamberlain (1850-1935) イギリスの言語学者。日本の古典や謡曲を学び、それを世界に紹介する一方、わが国の言語学研究に貢献した。

国家主義の風潮の盛んな時期であった。伊勢神宮を至高の祭祀対象として神宮の改革がおこなわれたのも明治4年から5年にかけてであった。しかし神仏分離と廃仏毀釈を行使しての天皇神権の理論に反対の立場の論者も登場してくる。グリフィスの先の神道観はこの時期とも重なっている。

3. 神 話

イ.『古事記』は上中下の三巻から成っていて、上巻は神話体系を構成している。その天地創造は初めに神があって、天地は神によって創造されるのではなく、古事記では初めに天地があって神々が誕生する。つまり創造主がないのである。キリスト教国から来た者にはこれが不思議なことであった。だから神道という名の古代の土着の宗教の教義上の基礎をこの神話においたのである。なかでも外国人に最も人気のあった神話は天照大神が弟の素戔鳴尊の乱暴な行為に怒って、こもったという天の岩屋の話である。



* 1

この話をグリフィスは *Japanese Fairy World* という日本おとぎ話のなかで陽気な読物に脚色している (*How the Sun Goddess was Enticed out of her Cave*)。話の筋を助けるために古事記にはな

* 1 *Japanese Fairy World: Stories from the Wonder-Love of Japan* by W.E.Griffis, Schenectady, New York, 1880. 口絵. 'How the Sun Goddess was Enticed out of her Cave.'

いが、岩屋の前に大かがり火を焚かせたり、鈴を鳴らすなど騒々しく囃したてるような描写がある。とくに面白いのは天宇受賣命^{あめのうずめのみこと}が生き身に表現されていて、太っていて血色がよく、顔はえくぼだらけ、目にはいたずらっぽい笑みのある陽気な女神である。この女神がいろいろその能力を発揮するのだが、そのところを古事記の訓み下し文^{*1}で引用すると、

天宇受賣命^{あめのうずめのみこと}、天の香山^{ひかげ}の天の日影^{たすき}を手次^かに繋けて、天の眞折^{まさき}を鬘^{かづら}として、天の香山の小竹^{ささ}葉^はを手草^{たぐさ}に結ひて、天の石屋戸^{いわやと}に槽伏^{うけふ}せて踏み^ふ轟^{とどろ}こし、神懸^{かむが}りして、胸乳^{むねち}をかき出^いで裳緒^{もひも}を陰^{はと}に押し垂^おれき。ここに高天^{たか}の原動^{もと}みて、八百萬^{やっぴゃくまん}の神共^{かみども}に咲^{はら}ひき。

神懸りという神が人に乗り移った時の状態をグリフィスは“The spirit of folly seized her”と没我の境地の女ととらえた。天宇受賣命が古事記では歌舞能力の神格化であるが、話の方では押さえのきかない忘我状態の女になった天宇受賣命は、

Becoming still more foolish, Uzumé waved her wand wildly, loosened her dress, and danced till she had not a stitch at clothing left on her. [p.303]

とこのように開けっぴろげになってしまった。そしてこの話は「故^{かれ}、天照大御神出でましし時、高天の原も葦原中國も、自^のら照^{おのづか}り明^てりき。」で終わらない。「目から暗い影が消えていって、人の表情が再び明るくなりました」(The gloom fled from all eyes, and human beings again became “white-faced”). そのあとにはこの禍が転じて人間に利益をもたらしたとあり、必要から生まれた製鉄、珠作りなどの技術が人間の道具作りに役立つたという。さらに歌舞や太神楽の発生と、子供の遊びにもこの話の影響が及んでいるという。

そういえば古事記の「天の石屋戸」には神社に祭ってある鏡、御幣、神、勾玉、注連縄がそろって初登場してくる。日本では女が掃除をしたり、水を汲んだり、家事をする時に、着物の袖をわきの下までたくし上げて、肩の上に襷掛けするのは、天宇受賣命の襷掛けの名残りである。気をつけて見るとそういう名残が多い。そのことについてグリフィスは次のように書く。^{*2}

これらの名残はあわただしい旅の者やこの島に住む動機がまったく欲が目だけの居留外国人にはつまらない。無意味であっても、それが日本人と分別のある外国人の目には古くからの、宗教にゆかりのあるものにうつり、無心の喜びがわいてくる。とくに後者の外国人にとって、ただでさえ強い関心をそそる日本人にさらに新鮮な驚きと喜びを持つ源になる。

* 1 『古事記』 倉野憲司校注（岩波文庫）。p.37。

* 2 *The Mikado's Empire* p.53. 11.35-40.

All these relics, trivial and void of meaning to the hasty tourist, or the alien, whose only motive for dwelling on the island is purely sordid, are, in the eye of the native, and the intelligent foreigner, ancient, sacred, and productive of innocent joy, and to the latter, sources of fresh surprise and enjoyment of a people in themselves intensely interesting.[p.53]

□. グリフィスのこの古事記の知識は自分のために日本語の原書を読んでもくれた学力のある協力者の高橋五郎^{*1}と今立吐醉（後述）から主に得られた。『古事記』が外国語で読まれるようになるには、明治15年（1882）、チェンバレンの英訳古事記、*The Kojiki or Records of Ancient Matters* の出版を待たねばならなかった。日本人の精神的伝統を日本の外から考えるようとする傾向が目立ってきただけに、この英書の出現は大きな意味があった。

イにおいて古事記の上巻にあらわれた神話と外国人の神話への接近の様子について考えたが、ここにもう一つの重要な考えがある。それは cleanliness, lustration, purification という言葉で理解されている浄の原理であった。この原理が日本人の精神的支柱となって、武士道、大和魂といった日本人の精神の形成に役立つとみなされてきた。とくに日清、日露の戦いで日本が勝利をおさめた頃は、日本の国威の宣揚の根拠はどこにあるかで外国人の議論するところとなった。それに対して日本人のなかからも外国語を駆使してそれに応える者もあった。

その一人に岡倉由三郎（明治元年～昭和11年）がいた。由三郎は英語教師として東京高等師範学校で明治29年（1896）から大正14年（1925）まで在職して、英語英文学を講じ、英語教育にも尽力した。日本の古典文学に造詣が深く、ウィットに豊む授業で学生を魅了した。岡倉の *The Life and Thought of Japan*^{*2}（1913）は明治42年（1909）、アメリカの *Lowell Institute* の招聘を受け、ボストン・アセニウムで行った講演を本にしたものである。その講演の趣旨は戦勝国日本への外国の日本観が表面的であるといっ、その本来の生活と考え方を知らせるため、日本の文化の伝統性と頑固ともいえる保守主義について語った。日本の急速な欧風化には反骨を示し、あくまで日本精神の内なる力を誇り、外国の日本にたいする理解のないこと、またその圧迫に反対の気持ちを訴えた。神道と天皇を一体化した皇国観が岡倉の日本を考える根底にあった。

日本人の精神に内在する神の意志に従う傾向は、天皇とその政治及び権力に従うことにもなり、真の日本人として日本の土壌に足場を固めて、西洋の直接の模倣から解放されなければいけないというのが岡倉の主張であった。

より高度で高貴な精神状態に近づく手段は、正常な進化の疲れる道を退屈しながらとぼとほ歩くことしかない。もし西洋文明が幾世紀もかかった困難な努力の結果を、少しでも早く日本がその採用と同化に成功したとしたら、その理由は日本人もまた静かだが真剣に数百年にわ

* 1 明治のキリスト教的評論家（1856-1935）。横浜のブラウン塾に学び。聖書和訳に参加。

* 2 London and Toronto J.M.Dent & Sons, Ltd.

たって同じ辛い研究のために鎖国の閉ざされた扉の中で芽を育てることに従事してきたからである。

As it is, however, there is no other means of an approach to a higher and nobler state of mind but that of the tedious trudging along the wearisome road of natural evolution. If we have succeeded in adopting and assimilating, rather quickly, some of the results of the Western civilization, which had cost you many centuries of painful labour, it is because we had also been seriously, though silently, engaged in fostering the germs within the closed doors of political seclusion, for hundreds of years of equally painful investigation. [p.46]

ボストンの聴衆に岡倉は日本の表面だけを見ないで、日本のなかで芽生え、それを養成してきた日本人の心について知ってほしいと働きかけたのである。当時41歳の由三郎はすでに英文学研究の泰斗であったが、その学識のもう一つの背景に兄覚三の影響があった。岡倉覚三（文久2年—大正2年）すなわち天心である。

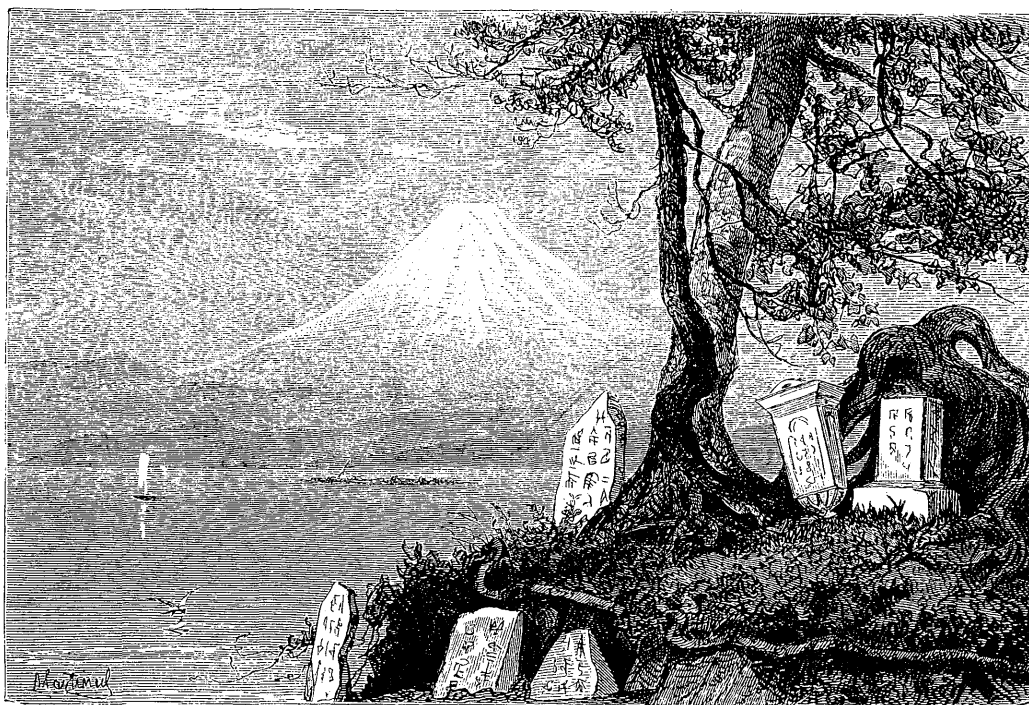
覚三、由三郎は父、覚右衛門、母、この（旧姓濃畑、福井県三国出身）の次男、四男として横浜に生まれた。福井藩の御納戸役であった覚右衛門は、安政6年（1859）、藩命により横浜に出た。藩が横浜に越前の特産品の生糸、絹、紬を扱う店、石川屋を出したが、その支配人に抜擢されたのである。福井藩士橋本左内の進言によるものであった。この店は廃藩置県後の明治6年に廃業した。天心は酒を飲み、興が乗ると、「灯火のもとには菜種の油なり、蝶がこがれて会いにくる」と橋本左内の作った小唄をうたったと伝えられる。

この兄弟が時と所を同じくして講演、出版に活躍したのが、日露戦争後もないボストンにおいてであった。覚三は明治38年（1905）、*The Ideas of the East with Special Reference to the Art of Japan, The Awakening of Japan*、明治39年（1906）、*The Book of Tea*を、由三郎は明治38年、*The Japanese Spirit*を出版した。ボストン美術館に勤務して美術品蒐集などの仕事をしていた天心の美術についての思想は、西洋美術依存を離れた、日本民族の伝統的な文化意識が基礎にあった。

由三郎の *The Life and Thought of Japan* はその多くの頁が兄ゆずりの美意識に裏打ちされた日本の美の解説に与えられている。なかでも日本人の生活にあらわれるいわゆる「きれい好き」（the love of cleanliness）について、

日本人のいわゆる精神的特徴の多くは、その起源を大の清潔好きとその反対の不潔嫌いに負っている。日本人の簡素好みの始まりはこの根源のおかげである。新しいものの好きもまた、それに伴う好奇心といっしょに新鮮さを好む結果である。日本人のよろこぶ整頓、複雑な作法、明確な社会階級、古くて骨董趣味に満ちたものへの強い好み、などこれらもまた同様にその根は清潔好きにある。私の考えではこれらはみな関連があり、当然、大の清潔好きと不潔嫌いという顕著な考え方からおこっている。

Thus you see that many of the so-called mental peculiarities of the Japanese owe their origin to the love of purity, and its complementary hatred of defilement. To this fountain-head is to be attributed the origin of our taste for simplicity. The love of newness, with its necessary accompaniment, curiosity, is another outcome of the love of freshness. Our love of order and complicated etiquette, our strong taste for well-defined social gradations, and for things old and full of antiquarian flavour, may also for the same reason have their roots in a love of neatness. They are in my view associations which naturally result from the predominant idea—love of cleanliness and dislike of defilement. [p.17]



* 1

4. 生活のなかの仏教

ここで再びグリフィス日記にもどり、今度はそこに住む人々の生活と仏教の結びつきを見ていこう。あいかわらずの散歩だが、しかし熱心に見て歩いて簡潔にその印象を日記に綴って行く。墓地や苔のむした石仏。参拝人で混雑する寺の祭礼と僧侶の楽人、白や青や赤の着物を着て、高

* 1 *Our Life in Japan* by R. Mounteney Jephson, and Edward Pennell Elmhirst, London: Chapman and Hall, 193 Piccadilly, 1869. 口絵。

い冠をかぶり、髪飾りをつけた子供。老僧の説教。説教がすむと、皆、声をあわせて祈る。説教中に煙草をすうたり、茶菓子を買ったりもする。

その1。「福井には仏教の宗派が9つある。私の食卓には5つの宗派の代表者^{*1}が坐っている。」(明治4年10月22日)

その2。「中野、大岩、吐酔と大きな寺へ行った。通りは大勢の人で、店は大繁昌であった。寺は縁側までも人があふれて立錫の余地もなかった。多くの僧が読経をしていた。ろうそくの火、お祭り用の木。燈明があった。五百人が数珠をかけて両手をあわせ、ナマミダをむなしく繰り返して祈っていた。みんながふりむいて異人の私を見た。他の大きな寺へも歩いて行った。そこでは数百人が寺に付属した食堂で、ご飯、餅、大根を出してもらって食事をしていた。飯と汁をつくり、煙と汗でつかれて腹をすかせた人が、炭火で餅を焼いたりして板の間で食べていた。釜たきが炭をかき集めていた。金銭を数えたり、受取ったりする人がいた。まことににぎやかな眺めであった。靴をぬいで、私達は僧の部屋に入った。そこは僧が着替えをし、眠り、食事をする。忙しそうで、しばらく彼等と話してから、長い廊下を渡って、大きな仏壇へ行った。そこには金箔の柱、木、ろうそくがあり、数千人の参拝者が坐っていた。境内は人でいっぱい、食物の屋台が出ていた。すべてが楽しくにぎやかでおもしろかった。夜と早朝にも勤行があった。」(明治5年1月7日)

その2というのは親鸞の遠忌で、祭りは7日間続き、町は田舎から出て来た人で混雑し、2つの大きな寺は説教を聞く人で満員であった。和暦では2月14日から始まったことになる。

福井が仏教王国であることをグリフィスは見抜いていて、神道と仏教の姿を学者と民衆の両方の立場から学ぶ機会があったと書いている。^{*2}それは日記にも記載されてるように、まわりが大寺院、寺、神社、神話と伝説の豊潤な景色のなかでの生活であった。だから日本の宗教について知ろうとしても書物からだけではその半分も分らないだろうといって福井生活に感謝している。11月30日の日記には夕べの散歩のとき、父、母、子供の家族が、鈴、仏典、ろうそくを持って、燈明のついた仏前で祈っているを見て、感動したと記している。グリフィスは日本に来て以来、アメリカの数種の新聞社へたびたび日本通信を書いて送っていたが、この感動を次のように記事にした。^{*3}

山道をたどって行くと、木造の古い数軒の寺と釈迦堂があり、石の塚の大きな塔があった。その塔にはたくさんの風鐸と大きな梵鐘がさがっていて、日の出と夕暮にその鐘から厳かな美

*1 グリフィスの家に住込みの5人の学生のこと。

*2 *The Religions of Japan* Preface viii, ll. 30-32.

*3 'A Japanese City' for 'The Home Journal' 1871.

しい音色がこだまする。それを聴いて人々はお祈りの時間を知らされる。この前の夕方、日暮前の散歩をしていて、入り口の障子が半ば開いている家を通った。そのなかで仏壇の前に、父と母と子供と、母に抱かれた赤子が坐っていた。蠟燭が燃えていた。小さい祭壇に香の煙が立ち上っていた。みんなが手をあわせて、頭を下げて、唇で真剣に祈願をつぶやいている様子は、とても美しく興味のある眺めでした。お祈りがすんで、父親が小さな鈴を三度鳴らし、また頭を下げると、仏壇の下に置いてある場所から一冊の本を大事そうに取り出して、二、三分、声を出して読み、もう一度頭を下げて、お参りは終った。ここで我々は偶像破壊者、即ち、この国の人々の大事に守ってきた迷信を着実に崩してゆかねばならないための科学と、その迷信に取って代らねばならない信仰の開拓者であるが、彼等の儀式の美学に目をつむることは出来ないし、彼等の寺の美しい鐘の音に耳をふさぐことは出来ない。日本の鐘は米国の鐘のような澄んだ高い響きがまったく無い、そして変化がないために、ポーやテニスンといった詩人に、その完全な作品のための題材をもたらすことは出来なかったであろう。けれどもそれが使われる目的、即ち、おごそかな参拝や警報のためには鐘は優れている。

福井藩がグリフィスと交わした雇いの契約書にあるヨーロッパ式の家が完成し、10月にはグリフィスは明新館のお気に入りの学生5名を住込ませた。若くて能力ある日本人にグリフィスはキリスト教文明の何かを漸次ひそかに教えたいと思ったのである。日曜日の朝はいつもこの家族は新約聖書からマタイ伝を読んだ。その学生の一人が先述した今立吐酔であるが、ここでグリフィスと吐酔の師弟関係を両者のおかれたキリスト教徒と仏教徒の立場から明治10年頃までの仏教について考えてみるのも意味があるだろう。^{*1}

吐酔少年の印象をグリフィスは姉マーガレットへの手紙にこう書く^{*2}。「吐酔もまだ15歳のすばらしく頭の良い少年で、女子のようにおとなしく、ブリリアンカットのダイヤのような才能に輝く美少年です。吐酔はフランス語、英語、化学を学んでいて、私のフランス語の組の少年を教えています。吐酔は寺の子でしたが、寺を出るように私が懇願していました。長い間、否定の返事でしたが、ついに金糸の襟と縮緬の衣をたたんで、今は寺を離れています」。眉目秀麗な少年な

*1 今立吐酔 安政2年(1855)越前鯖江(現福井県鯖江市松成)の満願寺に生まれる。明治4年(1871)福井藩校明新館でグリフィスに習う。明治6年(1874)開成学校に入学。グリフィスの帰国に伴って渡米。グリフィスの *The Mikado's Empire* の執筆を助ける。明治8年(1875)ペンシルバニア大学入学、化学専攻。明治9年(1876)西本願寺第二回海外留学生給与を受ける。明治12年(1879)ペンシルバニア大学卒業(バチェラー・オブ・サイエンス)帰国。京都府中学校の理化学教授に委嘱される。明治15年(1882)京都中学校(現洛北高校)初代校長。以後、鹿児島造士館長、北京駐在弁理公使など歴任。昭和2年(1927)福井訪問のグリフィス(84歳)と旧交を温める。昭和6年(1931)死亡。享年76歳。著書。①『仏教問答』*A Buddhist Catechism according to the canon of the southern church* 米国人エッチ、エス・ワルコット氏著 日本京都中学校長今立吐酔訳 仏教出版会 明治19年。② *The Tannisho (Tract on Deploring the Heterodoxies)* 今立吐酔英訳 東方仏教協会 昭和3年。

*2 1871年10月28日付。



* 1

したグリフィスは、吐酔がクリスチャンになるのを期待した。しかし吐酔は「小子ハ固ヨリ阿弥ノ本願ニ帰順シテ大心ノ光明ノ中に住シ末ハ永ク安養ノ浄土ニ生ヲ求ム身」であった。開成学校在学中に僧侶の糊口安逸を貧乏の流行に反省を求める内容の手紙^{*2}を父に送っている。

各々自己反省シテ宗規ニ法トリ学問ニ志ヲ逞フシ猶教院ノ規則ニ依リ一日モ早く中教院及ヒ小教院ヲ設ケ僧侶ノ知識ヲ広クシ大法ヲ泰山ノ安キニ置テ従前ノ奸僧ニ自己前非ヲ悔ヒ正シキ教ヘヲ布キ外教ニ人化ヲ奪ハレサルヤウ

明治7年（1874）、グリフィスの帰国に伴って渡米した吐酔は5年の留学生生活をグリフィスの経済援助がなくなった後も苦学のうちに送った。ここでも真宗の門徒の教化と真宗の旧幣の改正改良について、自ら改めて他に及ぼすようにしなければならぬと説く手紙^{*3}を父に宛てている。しかし興味あることは「耶蘇教ノ日本ニ騒入スルモ是思想ノ自由ニ因ルナリ」の一行である。思

* 1 *The Mikado's Empire* p.200 Temple-bell from Kioto, with Dragon-bow, Inscriptions, Representation of Ten-nin (angel), and of Buddha in Nirvana on the Lotus.

* 2 越前国今立郡松成村，今立乗永宛（開成学校在学中の明治7年頃）。

* 3 越前今立郡松成村，今立乗永宛（明治8年9月4日付）。

想の自由すなわち宗教の自由ととれるこの言葉の重みを吐酔は留学生活で実感していたのであった。

5. 神道とキリスト教

自由ということで、ここでもう一度^{*1}、*The Japanese Nation in Evolution* (1907) で著者のグリフィスが述べている日本精神発達の歴史のなかの個人の精神的発展について読んでみる。西洋と比べて日本は恥じるところはない。西洋もまた奴隷の身分、農奴の身分、無知、文盲、野蛮状態、未開状態、封建制から秩序と法と自由へ、神話、迷信、おとぎ話から科学、哲学、宗教、文明へと進化してきたからである。日本に教化、義務、道德生活、宗教上の清浄 (purity) が進んで行けば、世界に冠たる国になる希望に満ちている。しかしそのために必要なことが一つあるというのである。

共同社会の文明、人間存在の不完全な認識、万物に広く行きわたる一神教の認識不足があつては、十二分の個人の自由に満ちあふれた文明、人間性の価値の深い理解、とりわけ非人格的な法より高い存在の唯一神の明確な直観に、結局は太刀打ちできない。

Neither a communal civilization, nor an imperfect sense of personality, nor a lack of discernment of the Unity that pervades all can, in the long run, compete successfully, with that civilization which is instinct with the fullest individual freedom, with a deep sense of the worth of humanity, and above all, with a clear perception of One, or what, that in higher, even, than impersonal law. [p.118]

引用のこの文はグリフィス特有のレトリックで表現されていて、読む者にいろんな印象を与えるだろう。たしかに国の進歩発展を思わぬ者はいない。しかし問題はその理想とするところがなにか。それに答えられねばならない。日露戦争後の日本にグリフィスが提出した問題で理想としたのは、個人の自由のある文明と人間性の価値の理解とキリスト教知覚の三つの勧めであった。この三つの要素の認識が日本を西洋と並ぶ文明国にするというのである。戦いに勝っただけでは偉大な国とはまだいえないというのである。おそらくこれを読んでなまいきな口をきくといって憤慨する人もあったろう。勿論、グリフィスは日本にキリスト教を強要しているわけではない。日本が対外関係の緊迫のなかでキリスト教の影響力についての強い不安と恐怖とがあり、その危険意識に対抗するために神道国家主義体制が昂揚した明治1年から3年までの情勢^{*2}とはもう

* 1 「明治期英書の日本―日露戦争と日本精神―」山下英一。中部大学国際関係学部紀要No10 (1993年) を参考。

* 2 『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈―』安丸良夫著 岩波新書103 1979年。

すっかり変っていた。むしろ日本の勝利に弾みがかかって行く時、西洋から真に学ぶべきものと学ぶべきでないものを教える義務をグリフィスは感じたに違いない。しかしそれは受入られるより、反発される少数意見であつたろう。

明治28年（1895）、グリフィスの *The Religions of Japan* の出版の年は日清戦争中であつた。その神道の記述のなかで、すべての宗教をその欠点でなく、理想で判断するのが公平な義務としたあと、神道の理想をこう説明した。すなわち日本人をその身体や生活の面で清らかにし、簡素で正直に、互いに善意を持って生活するようにしむけ、日本人にその国を愛し、皇室を敬い、天皇に帰服させる。この清潔が敬神の一部あることから、キリスト教は遂行者として神道と合意に達するという。すなわち完全な人であり、愛国者であるイエスは不撓不屈の日本精神である大和魂を破壊するのではなく、むしろ大きく広く深くし、それを人類愛に変えるというのである。^{*1}

これは明らかにグリフィスの日本に肩を持った荒唐無稽な考えと笑われるだろう。しかし明治を考えるにあたり、安丸良夫の次の発言に耳を傾けるべきであろう。「ナショナリズムと文明は、当時の日本人がはじめて体験しつつあつた歴史のあたらしい内実であり、それを相対化するためには、べつの歴史的段階と経験とを必要とするはずだからである。」^{*2}。いわんや日本について真剣に考えようとするグリフィスのような外国人の発言においておやである。

* 1 *The Religions of Japan* p.97.

* 2 『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈—』安丸良夫著 岩波新書103 1979年。p.205.